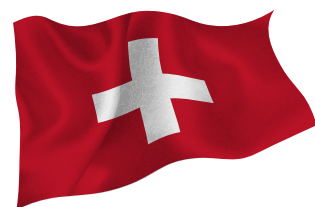


# ふくしまHIGH SCHOOL ACADEMY2025

2025.8/5→9/15 活動報告副読本 .....

**高校生がスイスや青森、  
福島を巡って考えた！**



## 高レベル放射性廃棄物の 最終処分の課題と提言



見る！聞く！学ぶ！  
社会問題への  
関心を  
絶やさない



P3・P4 行程紹介

P5～P10 生徒発表 第1部 研修成果発表

P11～P15 生徒発表 第2部 パネルディスカッション

P16～P18 来場者との意見交換

P19・P20 特集1:『学び続けることの大切さ』

東京科学大学附属科学技術高校 荻原 羽菜

P21・P22 特集2:『これからの処分地選定と私』

福島県立原町高校 多田 吏玖

P23・P24 特集3:『研修を通して学んだこと』

札幌光星高校 板倉 碧汰

P25・P26 特集4:『全国に最終処分への興味・関心と理解を』

福島県立磐城桜が丘高校 佐藤 藍

P27・P28 スイスに学ぶべきこと

P29～P31 最前線 ～この目で確かめる～

P32 講評／挨拶

P33 総括／閉会挨拶

P34 編集後記

## 参加者リスト

## ● 高校生



宮川 純樹

(福島県・磐城高校)



橋本 諒

(福島県・ふたば未来学園高校)



板倉 碧汰

(北海道・札幌光星高校)



菊池 健太

(福島県・磐城桜が丘高校)



佐藤 陽那太

(福島県・原町高校)



荻原 羽菜

(東京都・東京科学大附属科学技術高校)



佐藤 藍

(福島県・磐城桜が丘高校)



多田 吏玖

(福島県・原町高校)



尾崎 梓

(東京都・東京科学大附属科学技術高校)



渡邊 友萌

(福島県・磐城桜が丘高校)



中津川 喜賛

(福島県・相馬高校)



青木 志穂

(佐賀県・早稲田佐賀高校)



作山 心彩

(福島県・ふたば未来学園高校)



秋山 直輝

(茨城県・緑岡高校)



丸山 新奈

(佐賀県・早稲田佐賀高校)

## ● ファシリテーター

趙 天辰 (福島県立医科大学)

伊藤 結 (東北大学大学院)

伊藤 斐菜 (株式会社ビーエイブル)

山村 桃花 (福島県立医科大学)

## ふくしまハイスクールアカデミー2025

## 研修目的

社会問題を「自分事化」することで主権者意識を高め、共感力・協働力や表現力、多様な意見を尊重する力などを身につけるとともに、世界の直面する課題と福島の復興の重要性を国内外に発信することを目的とします。

## 本研修での3つの課題

- ① 高レベル放射性廃棄物の最終処分に関する技術や政策について、2つの地域(日本・スイス)の現状と将来を調査する。
- ② 日本(福島県)の現状をスイスの皆さんに伝える。
- ③ スイスで学んだことを持ち帰り、日本での最終処分のあり方を考え全国(世界)に発信する。

※この活動報告副読本は8月の現地研修と、9月15日に福島県・Jヴィレッジで開いた報告会の内容を踏まえて編集したものです。





# スイスと青森・福島へ核のごみ処分の行方を追って!



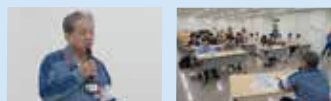
## 青森・福島編

■ 8月6日(水)  
福島県

前日5日にハッピーロードネット事務所で結団式  
・東京電力廃炉資料館を見学



・東電福島第1原発で小野明副社長の講話



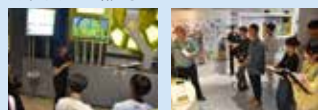
・現場見学(5号機使用済み燃料プール、ブルーデッキ、グリーンデッキなど)



青森県・青森原燃テクノロジーセンター泊

■ 8月7日(木)  
青森県・六ヶ所村

・日本原燃PR館見学



・日本原燃の増田尚宏社長が講話



・日本原燃施設の見学(ガラス固化体貯蔵施設、使用済み燃料貯蔵プールなど)



広野町・ハタゴイン福島広野泊

■ 8月8日(金)  
福島県

・講義(日本のエネルギー概要、地層処分の概要、スイスの取り組み)

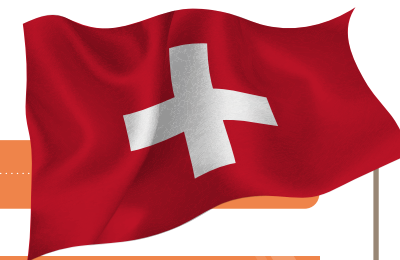


・プレゼン準備



広野町・ハタゴイン福島広野泊

## スイス編



■ 8月10日(日)  
チューリッヒ・ベルン

前日、貸切バスで広野町から千葉県成田市・ホテル日航成田に移動  
・成田空港からチューリッヒ空港



ベルン泊

■ 8月11日(月)  
グッタネン・マイリンゲン

・グリムゼル試験場見学



・マイリンゲン駅周辺で遅めの昼食



ベルン泊

■ 8月12日(火)  
ミューレベルク・イッティゲン

・ミューレベルク原発見学



・スイス連邦エネルギー庁研修



ベルン泊

■ 8月13日(水)  
シュターデル・ウェッティンゲン

・NAGRA職員との交流



・シュターデルの最終処分候補地見学



レーゲンスドルフ泊

■ 8月14日(木)  
ヴェレンリンゲン

・中間貯蔵施設ZWILAG(ツヴィラグ)見学



・パウル・シェラー研究所で若年層と交流



レーゲンスドルフ泊

■ 8月15日(金)  
チューリッヒ

・ホテルにて(チューリッヒ散策前の振り返り)



・市街地散策



8月16日にチューリッヒ空港から帰国。日本時間の17日午前に成田空港着



ス固化体貯蔵施設や使用済燃料プールを見学しました。また、東日本大震災時に福島第2原発所長を務めていた日本原燃の増田尚宏社長から震災後の対応などの講話があり印象に残りました。

福島第1原発や日本原燃では職員の方々と話しながら昼食を共にしました。実際に働いている人の本音や苦労が聞けて、貴重な体験ができました。

スイスでは8月11日にグリムゼル試験場見学、12日にスイス連邦エネルギー庁研修・ミューレベルグ原発見学、13日にNAGRA（スイスの放射性廃棄物処分の実施主体・放射性廃棄物管理共同組合）の職員との交流・最終処分地見学、14日に中間貯蔵施設ZWILAG（ツヴィラグ）見学を行いました。

グリムゼル試験場は1984年に設立され、地層処分や放射性廃棄物に関する研究・実証を行う地下研究施設です。国内外の企業と協力しながら研究・実証を行っています。

ミューレベルグ原発は福島第1原発の事故を受けて廃止され、2019年から



スイス初の廃炉が始まっています。使用済燃料は2023年に取り出しが終了しており、見学時は装備なしで施設内を回ることができました。

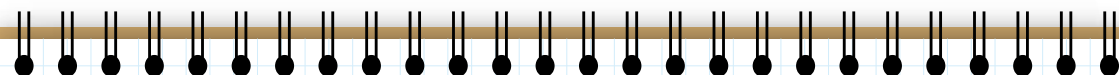
中間貯蔵施設はスイスの全ての放射性廃棄物が集められて貯蔵されています。かつてスイスは海外に委託してガラス固化処理を行っていたため、高レベル放射性廃棄物は使用済燃料とガラス固化体のどちらも乾式で中間貯蔵しています。

研修を通してデータで安全性を理解し、施設を訪れて安心感を得ることができました。スイスでは最終処分について地域住民と専門家が積極的に話し合っており、日本も国民がもっと興味を持ってほしいと思いました。日本では若者の関心が低いといわ



この後、2つの班が発表します。制度設計班はNUMO（日本の最終処分の実施主体の原子力発電環境整備機構）の最終処分事業の遅れに目を向け、住民の合意形成を保証しながらプロセスの迅速化を進めるための提案をします。興味関心班は、地層処分について若い世代に興味関心を持ってもらうため「対話・教育・情報発信」の3つ視点から提案します。

1つ目は「義務教育でエネルギーや原子力について学ぶ重要性」、2つ目は「地層処分問題に対するハードルを下げる」と、3つ目は「地域から広げる交流の輪」についてです。それでは各班の発表をお聞き下さい。



## 第1部 研修概要班 発表

### （最終処分の現状と課題）



発表  
高校生

作山 心彩 (ふたば未来学園高校)  
佐藤 陽那太 (原町高校)

尾崎 梓 (東京科学大学附属科学技術高校)  
丸山 新奈 (早稲田佐賀高校)

皆さんはスイスと聞いたなら何を思い浮かべますか。「チーズ?」「チョコレート?」「ハイジ?」。私たちは遅刻のペナルティーで腕立て伏せをしたり、慣れない英語での発表など辛い記憶が真っ先に浮かんできます。さて、今回の研修では国内やスイスを訪れ、最終処分の現状や取り組みを学びました。これから研修概要を発表します。

国内では、8月6日に本県の東京電力廃炉資料館や福島第1原発の見学、7日に青森県の日本原燃とPRセンターの見学、8日に日本のエネルギーや地層処分の概要などに関する講義を受けました。

福島第1原発では、グリーンデッキで東電の小野明副社長から処理水の海洋放出について話を聞きました。5号機の使用済燃料プール見学は、しっかりとした装備を着用し、通常は見学できない場所まで視察できました。ブルーデッキでは1、3、4号機のカバー設置の現状を確認し、放射性物質の飛散を防ぐ対応がなされ、住民を安心させる取り組みが分かりました。

日本原燃では、核燃料の再処理の方法を学び、ガラ





国から自治体に調査を申し入れる「申し入れ制」をとっています。これは受け入れの動きがある自治体に対して申し入れる受動的なものです。

一方、スイスも申し入れ制ですが、最初に候補地を絞っています。結果、スイスは日本より後に選定を始めたにもかかわらず、すでに予定地が決まっています。

そこでスイス方式の導入を提案します。ただし、スイスの予定地の地上施設範囲に住む住民は、決定まで自宅が対象と知らなかったそうです。スイス方式をそのまま導入するのはなく、スイスの良い所である処分地に適した候補地を絞る方法を取り入れます。



2つ目は選定プロセスの改善です。日本の選定プロセスは文献調査、概要調査、精密調査と段階を経ますが、各段階の間に地域の意見を聞く期間があり、ここに期限がないので見通しが立ちにくいのです。

日本では3自治体で文献調査が進んでいます。例えば次の概要調査の段階で住民が賛成し、精密調査に進んだ場合は意見聴取を簡略化する運用はどうでしょうか。プロセスを見直し、選択肢を持たせる柔軟な進め方といえます。

各段階の議論が長引かせず、見通しも明確にするため住民投票の導入を提案します。北海道神恵内村では概要調査に進むか議論が続いており、先行き不透明です。また、説明会だけでは全住民の考えが把握できない点に不安を感じます。また、住民投票を法制化し、全国同じプロセスで進めることができます。

3つ目は住民の合意形成のための新しい「シン・対話の場」の実施を提案します。対



話型全国説明会や文献調査が行われている自治体では、地層処分の内容や進捗を説明する場があります。だが住民の意見を政策に反映させることは少ないことが現状です。

シン・対話の場では、住民の意見を政策決定に反映させる制度をつくります。一方通行ではなくNUMOと住民が協力して具体的な内容を考えます。また、反対や中立の人も安心して参加できる工夫をします。

以上の3つの提案を実現することで選定プロセスの迅速化と住民の合意形成の両立が可能となり、停滞する現状の改善につながるのではないかと考えました。

まとめ

公募制から申し入れ制中心へ

選定プロセスの改善、シン・対話の場の導入

選定プロセスの迅速化 + 住民の合意形成を実現



## 第1部 制度設計班 発表

# 高レベル放射性廃棄物 地層処分の課題と提案

発表者：渡邊 友萌 (磐城桜が丘高校)、秋山 直輝 (茨城県立緑岡高校)、多田 史玖 (原町高校)、青木 志穂 (早稲田佐賀高校)、板倉 碧汰 (札幌光星高校)、橋本 諒 (ふたば未来学園高校)

発表 高校生

渡邊 友萌 (磐城桜が丘高校)

秋山 直輝 (茨城県立緑岡高校)

多田 史玖 (原町高校)

青木 志穂 (早稲田佐賀高校)

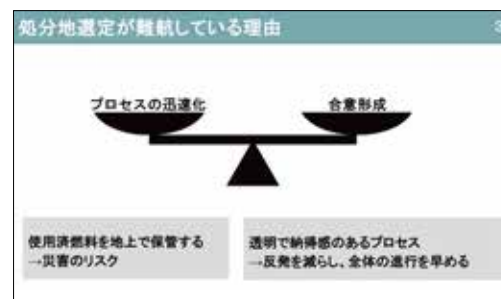
板倉 碧汰 (札幌光星高校)

橋本 諒 (ふたば未来学園高校)

日本の高レベル放射性廃棄物の最終処分事業の実施主体である原子力発電環境整備機構(NUMO)が設立されて25年が経ちました。地層処分事業は当初の計画から遅れ、本来ならば第3段階の精密調査に進んでいる予定ですが、いまだ第1段階の文献調査にとどまっています。この状況を踏まえ、進め方に問題があると考えました。地層処分の課題と解決に向けた提案について発表します。

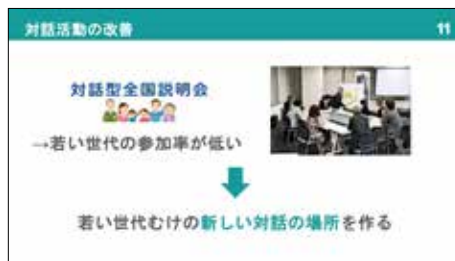
処分地選定が難航する理由に「プロセスの迅速化」と「住民の合意形成」のバランスをとる難しさがあります。だが、透明性があり納得できるプロセスが確立できれば進捗を早めることにつながるのではないのでしょうか。そこで①申し入れ制中心の選定方法へと変更②選定プロセスの改善③「シン・対話の場」の導入を提案します。

1つ目の申し入れ制中心の選定方法への変更について説明します。日本は自治体がNUMOに調査を応募する「公募制」と、





明会では若年層の改善です。NUMOの対話型全国説明会は若年層の参



そこで「アニメでの情報発信」を提案します。最終処分について「楽しみながら学べる」ようなアニメにするこ



動、教育の方法を見直す必要があります。そこで最終処分を伝えるための具体的な提案をしていきます。

がとると思います。次世代への教育活動にも提案がありま



加率が低いという課題があります。若年層は疑問や不明点があれば、すぐインターネットで調べます。そもそも会場に出向く感覚がないため、新しい対話の場をつくるべきだと思っています。

味・関心を高めるのは難しいと感じています。日本の将来のため、国やNUMOには活動に一層力を入れてほしいです。私たちも共に挑戦していきたいと考えています。



若年層が最終処分に対して興味・関心を持つってもらうことは大切です。しかし、現状の方法では興

「ふくしまハイスクールアカデミー」を支援しています。本研修では最終処分を深く学ぶことができており、ぜひ今後とも支援してほしいと思います。さらに本研修の全国展開してはいかがでしょうか。参加者の中には全く興味がなかったのに、今では興味を持つように変化した人が多いです。全国展開すればきっと若年層に興味と関心を与えることができます。

発表  
高校生

中津川 喜賛 (相馬高校)  
荻原 羽菜 (東京科学大学附属科学技術高校)  
宮川 純樹 (磐城高校)

佐藤 藍 (磐城桜が丘高校)  
菊池 健太 (磐城桜が丘高校)

情報発信や対話活動



皆さんは、自分たちの生活と最終処分に関係があると考えていますか。例えば税金の観点でみれば、処分地選定を進める際に受け入れを表明した自治体に交付金が交付されています。しかし、最終処分とのつながりを感じている国民は多くはないでしょう。



高レベル放射性廃棄物の最終処分の課題を解決するために「人々に最終処分について関心を持ってもらうためには」というテーマで発表します。



**坪倉** 危機感を感じたのはどの場面ですか。

**渡邊** 青森県六ヶ所村での高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センターを見学した時です。日本では最終処分地選定は文献調査の段階で、まだ最終処分場所も決まってい

**渡邊** 今の世代が対応しなければならぬ最終処分問題への危機感が印象に残っています。最終処分について全く知らなかったのが驚きでした。



渡邊 友萌

**宮川** 学校や親から放射線などの話を聞いてきました。これまでは事実の部分が多く、震災時の詳細な内容はあまりよく分かっていませんでした。増田社長の話では震災時にどう行動したか、人にどんな指示を出したか、事故を起こさないようにどう対応したかなど現場の声が聞けたことが印象に残りました。

**坪倉** 宮川さんはいわき市出身ですよね。浜通りで暮らし、ある程度の知識はあると思いますが、どのような話が驚きましたか。

場にいた人しか分からない話が一番印象に残りました。

## 第2部

## パネルディスカッション

## 放射線や原子力に関する教育について



## ● コーディネーター

坪倉 正治

(福島県立医科大学 放射線健康管理学講座 主任教授)

## ● 高校生パネリスト

宮川 純樹 (磐城高校2年)  
 渡邊 友萌 (磐城桜が丘高校2年)  
 秋山 直輝 (茨城県立緑岡高校2年)  
 萩原 羽菜 (東京科学大附属科学技術高校2年)

**萩原** 私は日本とスイスと違いで、安全と安心の考え方の違いが印象的でした。日本の最終処分の進め方は何度も地元との合意形成を図る形になっています。一方でスイスでは(地質的な観点から)安全を優先して最終処分の候補地を複数に絞る方式になっている。

**坪倉** 今回の高校生から最終処分地選定の進め方への意見が多くありました。日本とスイスの比較を通し、主に日本のプロセスが丁寧すぎるのでスイス方式に移行したほうがいいとの意見と、現状のままでいいとの意見があった。制度設計班の方に聞きますが、どんな議論があったのか紹介してください。

**渡邊** 住民の声を聞かなくていいという話ではなく、一つ一つを丁寧に対応するのは大事です。その中で石橋を叩きすぎていて逆に決定に時間かかっているという点が議論になりました。

**秋山** 結果的に班での議論ではプロセスの簡略化をした方がいいとの結論になりました。



萩原 羽菜

**坪倉** 制度設計班ではない萩原さん、宮川さんはどんな考えがありますか。

**萩原** 私は日本の丁寧な進め方は悪くないと思います。ですがスイスと比較すると、日本は安心のためや反対派への対応に必死な印象を持ちました。

**宮川** スイスはまず国が候補地を絞る点で進め方として早いと思いました。これを日本で導入すると反対が起きるのではないのでしょうか。やっぱり日本のプロセスは仕方ないのかなと思います。一方、日本は時間が掛かりすぎるので、一気に進展させる対応も必要なのではないかとも思います。

**坪倉** 私も福島で働いており、丁寧に住民に対応することが優先順位の最も高いところにあります。ですので住民を犠牲にする議論はしづらいなと思っていました。この4人でも微妙に意見は違っています。制度設計班は最終的に意見が合意しており、どんな議論があったのですか。

**秋山** 議論では選定プロセスの中で、早い段階から住民の意見を聞くように変更することで、もっとスムーズに候補地選定ができるのではないかと結論に至っています。

**渡邊** 実施主体のNUMOと住民が具体的な話し合いを前もって進めることも大事だという議論もありました。例えば風評が起

**坪倉** まずは班での発表を振り返っていきましょう。日本やスイスでさまざまな場所を巡って一番印象に残った点を話してください。

**秋山** 原子力施設に対する日本とスイスの価値観の違いが印象に残りました。例えば、日本では原子力施設は防護服を着て見学したのですが、スイスでは普通の格好で見学しました。このあたりに違いが出ていると思いました。



秋山 直輝

**坪倉** スイスは厳し過ぎないといった状況でしょうか。

**宮川** 青森県の日本原燃施設を見学したことです。東日本大震災時に東京電力福島第2原発の所長だった増田尚宏社長の講話では、震災当時に働いていた方々の実際の行動など現



宮川 純樹





**荻原** 東京では最終処分の話がほとんど出ません。そもそも大きな社会問題になっていないためだと思います。電気を使用している私たちは、原発から出る放射性廃棄物の最終処分に責任があります。ですが東京の人たちは電気が使えるのは当たり前で、最終処分とは切り離して考えているので必要性を実感できていないのだと思います。そこで東京の人にもっと必要性を広めなければいけません。放射性廃棄物を片付けるのは当然だという考え方を身近に実感するよう広報したほうが良いと思います。

最終処分の問題は日常生活に出てこないし、一般の高校生が触れることはないと思います。その中で、興味関心班の発表では大学進学の際のキャリアになると言っていたのが本質を突いていると思います。つまり広く知ってもらうために、何かと抱き合わせる必要がありそうです。高校生の皆さんは今回の研修にどうして参加したのですか。

**宮川** 僕は放射線を学びたいという動機よりも、スイスに訪問できることに目が行ってしまいました。気軽な気持ちで参加したんですが、研修では踏み込んだ内容が多く、現在は自分の考えを言える状態になっています。結果的に参加して良かったと思っています。

**坪倉** 西本理事長がとても喜ぶコメントですね。渡辺さんはどうですか。

**渡邊** 理由は2つあり、1つ目はスイスに行ってみたと思ったこと。2つ目は高校の先輩方が参加しており、私も先輩方のようになれるんじゃないかなと思って参加しました。

**坪倉** 研修を毎年継続していることで、過去の参加者がファシリテーターや会場運営で協力しており、人材がつながってコミュニティが広がっていますよね。秋山さんはどうですか。



**秋山** 最初は興味が薄かったのですが、親にスイスに行ってみないかと誘われて、資料を見てから好奇心が湧いてきて参加を決意しました。

**坪倉** 秋山さんは東海村長（山田修氏）をカッコいいし、尊敬していると言っていましたね。

**秋山** 尊敬しています。

きた場合はどうするかを話し合い、解決策や改善策を構築しておくといった点です。

**坪倉** 高校生は選定プロセスなどを理解し、変更した方が良くない意見を持つところまで達しています。意見の善し悪しよりも、成長を感じていただきたいと思います。次は情報発信や対話に話題を進めます。興味関心班は、若者により焦点を合わせた情報発信を訴えていましたが、この点を説明してください。

**宮川** 原発事故を例に挙げると、大人の世代はニュースなどで情報を得て、原発に対する自分の考えを持っています。ですが若者は原発事故の情報を大人から得ることが多いと思います。大人の考えをそのまま受け取ってしまうのです。若者にさまざまな視点の情報を提供することで理解が進むこともあります。ですので若者に焦点を合わせた情報発信の重要性を訴えました。

**荻原** 最終処分の場合、必要に迫られた時に知識の少なさから議論に関与できないのは避けたいと考えました。大人になつてから学ぼうと思っても忙しかったり、機会が無かったりするかもしれません。そこで若者の教育を始めなければいけないと思いました。この会場で思ったことですが、大人の皆さんの表情がすごく怖いんです。これでは若者に伝わりづらいかもしれません。若者の方が同世代に情報を広げやすいと思います。



ますので、私たちが最終処分について広報していきたいと思いました。

**坪倉** 私自身にもつまずけるのが、大人は若者の生息をあまりにも知らないということ。興味関心班の「チャット」の提案に気付きをもらいました。高校生が言うには、そもそも若者は説明会に行かない上、気になるものはまずインターネットで調べようと。ところが知りたい情報はあまり得られなかったとのことでした。つまり

チャット自体に意味があるという話ではなくて、情報発信の形を若者向けにしてほしいという提案でした。

続いて震災・原発事故の伝承や当時の気持ちをどう伝えていくかという議論に入ります。高校生の一人は、悪い話をいっぱい聞かされて、良い印象の話は少なかったという認識を持っていました。ところが日本原燃の増田社長から当時の話を聞いて感情が動かされたと話していました。震災や原発事故の情報をどのように得て、どんな印象を持っていますか。

**渡邊** 福島出身なのでいろいろな方から当時の話を聞かされたり、学校でも学ぶ機会があり、一通りは分かっているつもりです。ですが深く知っている訳ではありません。ですので私も増田社長の話を聞いて心を動かされました。

**秋山** 茨城県東海村出身なので、村内には原子力関連施設があり、かつてはJCO臨界事故があったことも知っています。ですが、詳しく知っているかというところではありません。

**坪倉** 皆さん表層の情報は知っているという状況でしょうか。歴史や出来事を知る学習に比べ、増田社長の話を聞いたり選定プロセスの制度設計を議論するなど今回の研修のような学習は質が違います。東京出身の荻原さんはどうですか。





**坪倉** なんだか言わせたみたいになってしまいました。秋山さんは村長の働いている姿を見て、原子力に興味を持ったのかなと思いました。萩原さんはどうですか。

**萩原** 私は昨年、高校の先輩がこの研修に参加していたので、東京で開かれた報告会に友達と一緒に聴講しました。その際、北海道寿都町から参加した女子生徒が印象に残りました。私も女子生徒のように報告できたらいなと思ったのがきっかけです。

**坪倉** 4人のきっかけを聞くと、高レベル放射性廃棄物に興味があったという人は1人もいない点は大人が認識すべき事実ですね。大人も若者の理解が大事だと言うのですが、情報発信の方法で若者ともっとコミュニケーションが必要だと再認識しました。

## 来場者と意見交換

(敬称略)

研修に参加した高校生15人が回答する質疑応答が行われ、来場した大人や大学生、高校生らとの熱い議論が交わされた。NPO法人ハッピーロードネットの西本由美子理事長が司会進行を務めた。

**西本** 恒例の時間がやってきました。大人の皆さんは覚悟してくださいね。(壇上の)高校生たちも答えるだけでなく、遠慮なく質問してください。まずは大学生から行きましょう。



**伊東聡太(東北学院大1年)**

私は2023年にふくしまハイスクールアカデミーに参加しました。今回の皆さんの発表の中で、情報発信の改善を訴えていました。情報の受け手にはどんなことを求めますか。



**西本** この質問に答えられる人は。

**菊池健太(警城校が丘高校)**

最終処分事業の課題を解決に近づけるためには、ただ学ぶだけでなく、自分の中に落とし込むことが何より大事なのかなと思いました。



**西本** 先輩ももっと頑張ってくださいね。はい次どうぞ。

**佐藤未悠(原町高校2年)**

私も2024年にふくしまハイスクールアカデミーに参加しスウェーデンを訪問しました。ス

た。私の経験からですが、学校での放射線教育で子どもたちに興味を持ってもらうには、感情を乗せないと言えないし、伝わらないと思います。大人が発信するときは実際に感情をどう乗せるのかを考える必要もあると思います。

さて、最後は高校生の皆さんが研修で学んだことをひと言ずつ話して締めたいと思います。

**宮川** 今まで放射線について学校や親、メディアでしか情報を得ることができなくて、中身にあまり踏み込めていなかったです。その先を調べることができていなかったのですが、研修では現場の話が多くて、今までは表面にしか触れていなかったと実感しました。一歩先に踏み込んで人の思いを知ることができれば学ぶようになると思いました。

**坪倉** やる気があつて始めるんじゃない、始めるとやる気が出るというやつですね。

**渡邊** 私は自分事として考えることによって、解決策など色々と考えてくるものがあると思いました。今まで身近に感じていなかったもので、放射性廃棄物について考えたことがありませんでした。現地を訪れ、考えて自分事にできました。

**秋山** やはり原子力の問題は国民全体で考えなければいけないことだと思いました。

イスの状況はスウェーデンとも違うなと感じました。興味関心班の発表で研修の全国展開を提案していました。対象は高校生かなと思ったのですが、これからの時代を担うのは小、中学生も一緒です。そこで小、中学生の教育活動はどう考えていますか。

**西本** 誰か回答をお願いします。

**中津川喜賢(相馬高校1年)**

興味関心班で研修の全国展開を提案しました。私は小、中学生は海外研修をするのではなく、青森県の日本原燃施設や福島第1原発など国内施設を研修する活動が良いと思います。



**西本** じゃあ次も高校生で。

**高野育恵(相馬高校3年)**

私も昨年、この研修に参加してスウェーデンを訪問しました。そこで地層処分を進めるためには、住民との合意形成に向けた対話が大事であると学びました。一方で皆さんが提案した処分地選定を早く進めるためにプロセスを簡略化する方針も理解はできます。その上でスイスの候補地選定プロセスについて質問です。地元で拒否権がないとの説明が引っかけかりました。なぜ拒否権が無いのでしょうか。

**多田吏玖(原町高校2年)**

スイスでは候補地を段階的に絞っていく、最終的に一番安全な場所に決める方式です。この



制度や広報などを突き詰めて議論したほうがいいと思いますが、まずは国民にどう関心を持ってもらうのかを考えたいと思います。

**萩原** 研修を通して学びの大切さを感じました。私たちの発表内容に対して、指導者のフィードバックをしっかりと心に刻むことから取り組みました。それによりスイスでの学びでは、日本との対比や違いに関連づけることができました。さらにいろいろな課題を考えることもつながると思います。

**坪倉** 会場の皆様には、高校生の声を聞いていただいて、しっかりと意見を発表し、議論することができると感じてもらえたと思います。高校生は学びのきっかけができたので、引き続き考えることを続けてください。皆さんのような人が1人でも増えていけば、きっと社会は変わっていくと思っております。私自身も皆さんとお付き合ひさせて頂いて本当に良かったと思います。高校生たちに大きな拍手をお願いします。



際、地元自治体に拒否権はありません。そのため段階が進むたび日本のように許可を取る必要がなく、そのまま進んでいきます。最終的には国民投票を行って決める形になっています。ですので拒否権はあるともいえます。これは安全性を第一に考えているためだと思います。

**西本** 青森の高校生もどうぞ。

**沼辺奏楽(青森県立六ヶ所高校1年)**

スイスの周辺国のドイツやオーストリアは反原発政策を進めています。そこでスイスは周辺国にどのような対応をしたのでしょうか。



**板倉碧汰(札幌光星高校1年)**

私たちはドイツ国境近くの最終処分場候補地に行きました。そこには地上施設の範囲内にありながら、選定まで全く知らされていなかった家を遠くから眺めました。スイスでは地域会議という組織があり、そこでは地上施設をどこに置かなどを住民らメンバーが話し合って検討したそうです。メンバーには隣国のドイツ代表の人も入っており、話し合いは周辺国の人たちを巻き込んでいます。



**西本** そろそろ大人にも聞いていきます。じゃあ東海村の山田修村長にしましょう。まずは当選おめでとうございます。先ほど尊敬されているとありましたが、人気なのですね。

**山田修(東海村長)**

高校生たちは本当に素晴らしいと思います。大人は勘違いしていることが多いです。大人





は正しいことをやっていて進められると思っていますが、なかなかできないですよ。やはり若者の声を聞いて政策に反映すべきだなと思います。さきほどパネリストの荻原羽菜さんが「皆さんの顔が怖い」と言っていましたね。この問題の話になると、大人はしかめっ面をしてみようんです。そこで大人の表情を変えるため、どんなことをすればいいのでしょうか。

**西本** これは荻原さんが答えるべきだよ。はい、どうぞ。

**荻原羽菜** (東京科学大附属科学技術高校2年)

「大人の表情を変える」というのは、かなりの難問です。私の大人のイメージは、何を言ってもにっこりと笑ってくれない気がします。頑固で気難しくて、いつも眉間にしわを寄せ、子どもが何か言ったら生意気だと言っている感じです。今、皆さんが笑っている表情を見て驚いています。私たちは最終処分についているような提案をしました。ここに居る若者も最終処分の課題解決について同じ思いだと思います。この思いが継続し、来年以降も提案を通して皆さんを笑顔にできればいいなと思います。



**西本** 立派な答えだね。さて高校生の発表で情報発信の話がたくさん出ました。中川さん、質問はありますか。

**中川俊哉** (福島民友新聞社 取締役会長)

大変心のこもった熱い発表を聞かせてもらいました。昨今の新聞はオールドメディアと呼ばれ、なかなか若者の手にとってもらえない状況にあります。さて、さきほど興味関心班の発表で、アニメを通して情報発信す



から大人に聞いてみたいことはありますか。

**荻原羽菜**

SNSの広報について質問です。NUMOなどのSNSを見ると、いわゆる「映え」を狙ったものではないですね。担当部署は若手の方が運用しているのでしょうか。

**植田昌俊** (原子力発電環境整備機構 理事)

NUMOではさまざまなSNSを運用していますが、我々のようなおじさんは(対応が)無理なんです。NUMOの広報のNSN関係の最前線は皆さんより5、6歳年上の世代が主力です。入構して1、2年目の職員で感性を進めています。ところが今日の話を聞いていて「ああ、そうだよなあ」と思いました。止めちゃうのが我々おじさんなんです。「ちょっとやめとけ」みたいな。そこが今日皆さんにご指摘をいただいたので、しっかり改めて、18歳ぐらいの気持ちで取り組んでいきたいと思っています。



**西本** なかなか難しいですよ、18歳の気持ちになるのは。忘れてるから。はい、次ありますか。

**作山心彩** (ふたば未来学園高校2年)

高校生に質問です。スイスの国民は一人一人が政治に参加している意識が高いと感じました。私の周囲では廃炉や最終処分の話をすると「意識高いね」とか「真面目だね」とか言われて嫌な気持ちになります。皆さんの周囲はどのような反応がありますか。



**沼辺奏楽** すごく気持ちが分かります。私の周囲をみると、社会に興味がなく、スマートフォンの中だけに興味を向けていて、現実を目を向けなくなっているのは大きな問題だと思います。

るとの提案がありました。どのような内容のアニメを作るのでしょうか。

**宮川純樹** (磐城高校2年)

最終処分を主軸にしたアニメはつまらないと考えています。発表でも例に挙げたように「はたらく細胞」という体内細胞擬人化アニメのように放射線を擬人化して、若者が興味を得やすいようにして、情報を盛り込んでいく形にすると伝わりやすいと思います。



**西本** 大人の前で笑顔で話す皆さんは立派だね。高校生の情報発信の提案を受け止める側にも聞いてみましょう。

**山口彰** (原子力発電環境整備機構 NUMO 理事長)

情報発信について印象に残る提案がたくさんありました。我々の活動は対話型全国説明会などの場を設けて説明しています。提案ではチャットを活用してバーチャルで伝えるというものでした。会場でやりとりするよりも、気持ちを楽にしてコミュニケーションが図れますよね。我々はそこに思い切った踏み込みません。それは炎上を心配して躊躇してしまうんです。皆さんはSNSなどのメディアの使い方に慣れていると思います。そこで躊躇する大人の気持ちを楽にする一言をいただけませんか。



**西本** さあ誰が答える。

**丸山新奈** (早稲田佐賀高校2年)

インターネットは虚偽の情報が流れやすいのですが、誤情報で炎上を心配するのではなくて、正しい情報を伝える場所が増えるとい



**丸山新奈** 経済産業省の方に質問です。以前、環境省の方から政策は住民に対して促すものと聞きました。今回の研修の参加者は原子力関係の地域出身のため関心が高いのですが、関係のない地域の人にはあまり話を通じません。その人たちに對してどのように促していけばいいのでしょうか。

**横手広樹** (経済産業省資源エネルギー庁放射性廃棄物対策課長)

昨年に続いて大きな刺激と具体的な提案をいただき、身が引き締まる思いです。我々は理解の輪を広げたいと思います。例えば大學生が学園祭で一般向けに地層処分の理解活動をしたり、対話型全国説明会を各地で実施しています。ただ特効薬がないのも事実で、地道に進めているところです。こちらからも質問があります。選定プロセスの改善点がいくつか提案されましたが、結局は上から指示する形になっていませんか。現在でも地元への思いを持って取り組んでいる自治体があります。地元の思いを極力拾い上げる仕組みにしていきたいと思っています。そのあたりは皆さんはどう思っていますか。



**西本** 質問に質問を返すキャッチボールをしてきました。今の質問に答えられる人は。

**板倉碧汰**

僕は神恵内村出身です。村が文献調査に応募してもらった交付金で今春、新しい温泉ができ、にぎわいが生まれました。「この中で誰か一人だけ手を挙げてください」と言われると、国民性なのか率先して挙げづらくないでしょうか。これは最終処分も同様で、適している土地ではあるが、風評を受けそうとか、変に注目されそうだと考えてしまうのではないのでしょうか。現在の公募制を残しつつ、スイスのようにある程度絞ることも取り入れたほうが進めやすいと思います。

**西本** 横手課長の答えに高校1年生が応答しました。

う認識を持つべきだと思います。ぜひチャットが実現できたらいいと思います。

**山口彰** とても重要な意見です。間違ってもいいから発信し、違っていたら修正するという意識を持ちなさいということですね。ありがとうございます。

**西本** 大人は肩書があるからできないですよ。そこを解決するのが資源エネルギー庁ですよ。

**藤本武士** (福島原子力事故処理調整総括官)

今日話を伺って元気や勇氣をもらいました。我々は心配することがたくさんありますが、心配をしているがゆえに情報が伝わらないのは、うまく事を運べていないので、NUMOと一緒に勇氣を出して間違っても正しく直せばいいと言ったような心構えで進めたいと思います。



**西本** 高校生が福島第一原発を視察した際、小野明副社長や社員の方々とランチをしました。これは昨年の報告会で寄り添ってほしいと要望したことがきっかけになっています。社員の皆さんの反応はどうでしたか。

**秋本展秀** (東京電力ホールディングス 常務執行役員 福島復興本社代表)

ランチの反応は良かったです。大人は一步踏み出すまで躊躇しますが、そこを乗り越えて初めて見える風景があります。いろいろやってみて、気づいた事からまた次の一步を踏み出していくサイクルにしていきたいです。



**西本** これからもずっと仲良く高校生とコミュニケーションをとってほしいですね。今度は高校生

これができる私たちは素晴らしいですね。

**多田吏玖**

NUMOに質問です。対話型全国説明会は福島で開催してないと言われました。おそらく原発事故被害への配慮だと思われます。一方で、福島県内への情報提供が足りない側面もあります。今すぐには言いませんが、いずれは福島県内でもちゃんと対話の場を開いて、私たちに情報提供をして、話し合う場をつくってほしいと思います。

**西本** 対話型全国説明会を福島で開催してほしいという若者がいます。山口理事長どうですか。

**山口彰** 私は原子力の安全研究をやっており、福島の方々がどれだけ辛い思いをしたのかよく分かっています。今お話があったように配慮は必要だと思っています。ただ、説明会の目的は全国で問題を知ってもらいたい、考えてもらいたいというものです。だから福島だけ開催しないのは自己矛盾で、目的から考えるとおかしい話です。タイミングはありますが、やはり福島でも展開するのが使命だと思っています。提案をもらったチャット機能やバーチャルの方法を使ったら説明会の概念そのものがなくなって、日本中誰でも参加してもらえると思います。対話のやり方が変わってくるという知恵もいただきました。

**西本** 近いうちに県内の

高校でNUMOとの対話の場ができるかもしれません。もう終了時間になってしまいました。本当はもっとたくさんの人にお話を聞きたかったのですが、マイク回しが上手に行きませんでした。皆さん、高校生の意見を真剣に聞いていただいてありがとうございました。





特集

# 1 学び続けることの大切さ



東京科学大学附属  
科学技術高等学校

萩原 羽菜



## ◇ 日本の現状

ふくしまハイスクールアカデミー2025に参加し、私は「知ること」の重要性を改めて痛感させられた。研修に参加した全国各地の高

校生15人のうち、高レベル放射性廃棄物の地層処分について詳しい知識を持っていたのは、最終処分場の候補地がある北海道と佐賀県の高校生3人だけだった。私自身、この問題についてこれまで深く知ろうとしてこなかった一人だ。地層処分について理解していなければ、自分の意見すら持てないことに気づかされ、自らの無知を恥じると同時に、この問題に対する社会全体の関心の低さに強い疑問を抱いた。

最終処分を進める上での大きな課題は、社会全体が無関心であることだと感じた。もちろん、候補地では賛否が分かれ、活発な議論が交わされている。しかし、候補地から離れた地域では、賛否以前に、最終処分が話題にのぼること自体ほとんどないのではないだろうか。その背景には、この問題に触れる機会が少なく、自分事として考えるための必要性が伝わっていないことがあるのだろう。私自身も最終処分に関する知識が浅かったことを痛感し、学ぶことの重要性を実感すると同時に、多くの人が十分な情報なしに判断できない現状に危うさを感じた。

## ◇ 「安全」と「安心」

研修で最も印象に残っているのは、「安全」と「安心」は違うということだ。東京電力福島第一原子力発電所の事故は、「安全」とされていた基準を超える想定外の事象への備えが



不十分だったことが、根本的な原因の一つだろう。東電の社員の方からは、想定外の事態を経験したからこそ、将来起こりうるあらゆる危険を考慮して安全対策を進めていると

いう話を聞くことができた。一方で、日本では福島第一原発の事故以前にも、茨城県東海村のJCO臨界事故などが発生しており、原子力の技術がいかに進歩しても、人々の不安を完全には払拭できないのではないか。つまり、技術的な「安全」が、必ずしも人々の「安心」にはつながらないのだ。ただ、技術的な説明を受けたことで私自身の原子力に対する理解は深まり、知識を得ることで物事を多面的に考えられるようになったと感じる。



原子力発電所が現在も稼働し、今後再稼働される可能性がある以上、高レベル放射性廃棄物は増え続ける。地層処分の問題は、私たちが若い世代が大人になる頃には、避けては通れない社会全体の課題となっているだろう。だからこそ、今のうちから知識の土台を築き、賛成・反対いずれの立場であっても、根拠を持って自分の意見を述べられるようになる必要がある。

この研修を通じて、私はこれまで原発や地層処分を「知っていたつもり」に過ぎなかったと痛感した。今では、その本質的な課題を少し「理解できた」と言える。この経験を糧に、これからも学びを続け、周囲の人々との問題を共に考えるきっかけを作っていきたいという思いが強まった。

知ることは、行動を変える第一歩だ。安全や安心を誰かに委ねるのではなく、社会の課題に対して自分の意見を持ち、どうすべきかを考え続けられる人間になりたい。



## ◇ 今後の社会

私は、首都圏に住む一人の高校生として、これまでこう考えていた。「高レベル放射性廃棄物の処分場が必要なのはわかるけれど、どうせ都市部には作られないのだから、自分には関係ない」と。しかし、首都圏は日本でも電力を消費している地域の一つだ。だからこそ、その恩恵を受ける私たちは、この問題を「自分事」として捉え、考える責任があるのではないか。



## ② これからの処分地選定と私



福島県立原町高等学校

多田 史玖

民の声を丁寧聞く」という姿勢も大切にしたい、両国の制度の長所を活かす方法を考えた。具体的には、NUMO（原子力発電環境整備機構）が科学的・地理的な安全性を基に候補地を提示し、日本式の制度に沿って選定を進める。その上で、地域の事情に応じてプロセスを短縮するなど柔軟に対応する」というものです。専門家が候補地を示すことで安全性を担保し、自治体の負担を軽減できます。さらに、地域の事情に応じた柔軟な対応は選定の促進につながり、住民の声をより反映させることも可能になるはずです。

### ◆ 将来に活かしていくこと

今回の研修を通して、物事を合理性だけで判断するのではなく、その他の多様な要素を考慮する必要性を学びました。社会では、時に非合理的に見えることであっても、それを優先しなければならぬ場面があります。処分地の選定のように多くの人々の生活に影響を及ぼす問題は、合理性だけで推し進める

のは危険であり、人々の信頼の上に成り立つものであると強く認識しました。

また、「伝えること」と「伝わる」ことの違い、そしてその難しさも学びました。研修中何度もメンバーと熟議を重ねました。受け手の立場を考慮することの重要性を実感しました。今後は、要点を分かりやすく整理し、相手に「伝わる」ことを意識してコミュニケーションを取りたいです。

将来、人々の生活を支えられる大人になれるよう、努力を続けていきます。



### ◆ 感じたスイスと日本の違い

研修で特に印象に残ったのは、日本とスイスの価値観や国民性、そして、それに基づく最終処分地選定制度的違いです。日本の処分

地選定は、自治体からの応募を待つ「公募制」と、国からの申入れを自治体が検討する「申入れ制」を導入しています。これは、原爆や原発事故により原子力へのマイナスイメージが強い国民感情に配慮し、慎重に進めるためです。しかし、実際には国が申入れるのは自治体の意向を確認してからであり、計画開始から20年以上が経過した今も、処分地の選定は大幅に遅れています。

一方、スイスでは科学的・地理的な安全性を最優先し、国とNAGRA（放射性廃棄物管理共同組合）が主体となって候補地を選定する制度を採っており、すでに処分地を決定しています。また、直接民主制国家であるスイスでは、国の承認前に一定数の反対があれば国民投票が実施されます。研修でNAGRA職員の方々と話す中で、スイスでは原子力に対する否定的なイメージが少なく、むしろ前向きな姿勢さえ感じられ、こうした制度や価値観の違いを肌で実感することができました。

### ◆ 日本の処分地選定方法への提案

日本の処分地選定をどう進めるべきか、具体的に考えました。スイス訪問前は、短期間で合理的に処分地を決定したスイスの方式を日本も導入すべきだと考えていました。しかし、研修が進むにつれて、スイスの制度にも課題があることに気づき、考えが変化しま





特集

# ③ 研修を通して学んだこと



札幌光星高等学校  
板倉 碧汰



## ◇ 研修での学び

今回の研修を通じて、私は二つの大きな学びを得た。

一つ目は、仲間と協力することの重要性で

ある。研修中は夜遅くまで作業することも多く、肉体的にも精神的にも大変であった。さらに、取り組む課題には明確な答えがないため、深く悩み、考える時間も多かった。しかし、仲間と助け合い、支え合うことで、それらの困難を乗り越えることができた。時には意見が対立したり、準備が思うように進まず落ち込んだりすることもあったが、最終的には全員が納得のいく発表につなげることができた。

二つ目は、処分場選定の難しさである。私は、候補地の一つである北海道神恵内村で生まれ育った。村で生活してきた者として、調査がなかなか進まない現状に歯がゆさを感じることもあった。しかし、今回の研修で処分場選定の仕組みを学び、さらに神恵内村以外の関係者と交流することで、その複雑さと困難さを痛感した。また、報道を調べる中で多くの否定的な意見が寄せられていることを知り、粘り強く理解活動を継続していくことの重要性を改めて感じた。

一方で、東京や福島、佐賀など全国各地の高校生と交流できたことは、自らの視野を広げる貴重な機会となった。特に、他の班が発表で提案した「グーモチャット」や「シン・対話の場」は、これまでない発想で非常に興味深く、今後の地層処分を考える上で大きな刺激を受けた。

この研修で得た学びと素晴らしい仲間と



の出会いを糧に、地層処分や地域の課題について考え続け、将来に向けて自分なりの行動を重ねていきたい。

## ◇ これからの私

この経験を今後どう活かしていくか。私は、研修で訪れた日本国内やスイスの状況から、地層処分について人々が議論することこそが最も重要であると確信した。特に、神恵内村や北海道寿都町、佐賀県玄海町といった当事者である自治体では、その重要性はさらに高まる。

そこで私は、周囲が地層処分について議論する際の「後押し」となる存在になりたいと考えている。具体的には、神恵内村出身の高校生として、この研修に参加した立場を活かし、周囲の人々に議論を促していくつもりだ。

地層処分について積極的に議論する人は、決して多くない。その背景には、「興味がない」「自分には関係ない」という意識があるのではないだろうか。実際、神恵内村での対話の場への参加者は少なく、知人の小中学生や村民の多くも、まだ十分な関心を示しているとは言えないのが現状である。しかし、私のような高校生が積極的に参加する姿を見せることで、「自分も参加してみよう」と考える人が増えるかもしれない。そう期待している。

また、私が神恵内村の議論に参加することには、別の意義もある。限られたコミュニケーション内で議論が繰り返されると、意見が一方



向に偏ってしまう恐れがある。研修で全国の高校生と交流し、地元のと他の地域の意見との違いを実感した私だからこそ、多様な

視点を持ち込むことで、議論の健全な広がり

に貢献できるはずだ。

今後は、神恵内村での対話の場に積極的に参加し、研修で得た知識や考えを村民の皆さんと共有していく。そして、日常的に地層処分について語りかけることで、小中学生をはじめとした周囲の人々の関心を喚起し、議論への参加を促していきたい。この取り組みを通じて、地域社会全体で議論の輪を広げ、一人でも多くの人が地層処分について考えるきっかけをつくるのが、私の目標である。





特集

# 4 全国に最終処分への興味・関心と理解を



福島県立磐城桜が丘高等学校

佐藤 藍



## ◇ 国民と私の興味・関心

私はこの研修を通して、高レベル放射性廃棄物の最終処分に対する国民の興味・関心や理解を深めることの重要性を特に学びま

した。現在の日本では最終処分地の選定が思うように進んでおらず、特に処分地選定プロセスの第一段階である文献調査を受け入れる自治体が少ないことが課題だと感じています。この状況を打開するためには、国民が最終処分について正しく知り、文献調査の実施を容認する自治体が増えていくことが必要です。

また、最終処分事業が本格化する際に、国民の理解が不十分なままだと、感情的な意見や誤解によって調査対象地域の住民間にあつれきが生じ、関係性を損なう可能性があります。そのため、若い世代を含めた全国民がこの問題に関心を持ち、正しい知識を身につけることが不可欠です。しかし、現状では最終処分への全国的な認知度は十分とは言えず、この状況を改善していく必要があると感じます。

さらには、研修を通して「NIMBY (Not In My Back Yard)」という問題についても学びました。これは、最終処分地の必要性は理解していても、「自分の住む地域には受け入れたくない」と考える人がいるという問題です。NIMBY問題は心理的な側面が大きく、解決は容易ではありません。しかし、私自身が経験したように、関連施設を見学し、地層処分地の安全性を学び、同世代の仲間と不安や疑問を共有することで、漠然とした不安は和らいでいきました。この経験から、賛成・

反対の立場にかかわらず、対話を通じて最終処分への理解を深めていくことが、問題解決の鍵になると確信しています。



## ◇ 若い世代への提案

国民の興味・関心や理解を高めるためには、広報や対話の機会をより充実させることが必要です。特に、若い世代の認知度や対話型全国説明会への参加率が低い現状を踏まえ、若者に向けた情報発信を強化すべきだと考えます。具体的には、親しみやすいアニメコンテンツを活用した広報活動や、いつでも気軽に質問できるオンラインでの対話の場を設けることなどを提案します。

## ◇ これからの私

後に、私はこの研修を通して「自分事として考えることの大切さ」を学びました。私は原発事故で避難を経験したため、原子力に對

して「危険なもの」という先入観があり、関連する問題について学ぶことや考えることを無意識に避けていました。しかし、今回の研修で、高レベル放射性廃棄物の最終処分は單純に危険という言葉だけでは語れないと知り、先入観や周りの意見に流されず、正しい知識を得て自分の頭で考えることの重要性を痛感しました。

全国の人々がこの問題を知り、自分事として考える機会が増えることが何よりも重要です。そのためには、誰もが関心を持ちやすい広報活動や、参加しやすい対話の場をさらに充実させていく必要があります。そして私自身も、この問題について考え続けていくことを、ここに約束します。





## スイスに学ぶべきこと②



● 最終処分場の地上施設の建設予定地。唯一の住民1軒はすでに立ち退いた

スイスの核のごみの最終処分場候補地の「北部レグレン」では、大きな反対はないという。選定では科学的根拠や地質学的安全性を基準に段階的に絞り込んだ上で、連邦政府が設置した市民や地域を巻き込む「地域会議」が機能した。

スイスは1970年代から最終処分場の調査を始め、90年代に「オパリンヌ粘土層」の岩盤で地層処分を行う計画を作った。最終処分の実施主体「放射性廃棄物管理共同組合」(NAGRA)が地質条件から第1段階で6地域、第2段階で3地域、最終段階で「北部レグレン」の農村地帯に絞り、2022年に連邦政府に提案している。

各候補地で自治体や住民、経済団体、政党、教会のほか、隣接するドイツ自治体の代表者を含めた100人前後でつくる「地域会議」を設立した。参加者への専門的な情報提供で理解促進を図り、処分場の土地利用や地域発展も考えた。実際に選定の第2段階では住民の生活圏から近い地上施設の設置場所や施設のレイアウトを検討している。

最終候補地の北部レグレンでは地域会議の提案が反映されている。NAGRAは当初、全ての地上施設を候補地域内に建設することを想定し

ていたが、地域会議との協議を踏まえ、核のごみをキャニスタに封入する施設は既存の原子力施設に設置・増設する計画となった。北部レグレンでは処分場入り口などの地上施設はチューリッヒ州シュターデル自治体の農村地帯となり、唯一の民家1軒の立ち退きが決まった。

「簡単に決まったわけではない」。地上施設建設予定地を巡りNAGRA職員はそう強調し、「重要な点はプロセスの透明性を常に確保し、地域と関わり合う有意義な方法を見つけることだ」とした。地域会議メンバーの地元村長は「地域には厳しい意見を言う人もいるが、皆で話し合って解決しなくてはならない問題だ」と議論を振り返っている。

最終処分は長期の安全性が保証されなければならない。それには技術的な安全と同時に、最終処分場と長く共存する地域の理解が不可欠である。スイスでは候補地を絞り込む段階で地域会議という形で市民参加が進められた。地域に最終処分場が設置されると考えることで、「自分ごと化」につながった。

将来世代に負担を先送りしないためにも、国民誰もが最終処分場の責任に向き合わなければならない。しかし、国民の関心は低いのが現状だ。議論を高めるためにも、国はさらに広報や教育に注力するべきであろう。さらにスイスを手本とし、選定段階で地域が最終処分場との共存をイメージできるような仕組みが必要ではないだろうか。

最終処分は長期の安全性が保証されなければならない  
地域が共存をイメージできるような仕組みが必要

## スイスに学ぶべきこと①



● 地層処分の研究を進めているグリムゼル試験場を見学する高校生

原発から出る高レベル放射性廃棄物(核のごみ)の最終処分は原発立地国にとって決して避けられない課題だ。日本では核のごみはたまり続ける一方、肝心の処分地選定のめどすらつけられていない現状にある。

国内で貯蔵されている使用済み燃料は1万6770トンで、すでに貯蔵管理容量約2万1440トンの75%以上を占めている(2024年9月現在、日本原子力文化財団)。いつまでも先送りできない状況にありながら、国全体の議論に至っていない。

処分地選定では、北海道の寿都町と神恵内村、佐賀県玄海町で選定の最初の段階の文献調査が進められている。他に受け入れを表明した自治体はなく足踏み状態にある。故に日本の原子力政策は「トイレなきマンション」と揶揄される。

国際的に処分方法が検討され、核のごみを地下深くの安定した岩盤に埋める「地層処分」が最も適切であるというのが各国共通の考え方だ。日本は使用済み燃料を再処理して利用できるウランやプルトニウムを取り出し、残った廃液をガラスに溶かし込んで「ガラス固化体」にして、ステ

ンレスの容器や緩衝材で覆って地下300メートル以深に処分する方針だ。

スイスは最終処分事業で日本の先を行く。地層処分を行う処分場の候補地を決めている。実施主体である「放射性廃棄物管理共同組合」(NAGRA、ナグラ)が2022年、科学的根拠に基づき、地質学的安全性を基準に候補を提案して段階的に絞り込んで決めた。

最大都市チューリヒの北側の地域「北部レグレン」(チューリヒ州とアールガウ州にまたがる)を最終候補地として提案し、2024年11月に連邦政府に認可を申請している。今後、2030年代には場所が最終確定し、処分場建設を進めて、2050年以降の操業開始が見込まれている。

NAGRAが運営するアルプス山中の地下研究所「グリムゼル試験場」は1983年に設置され、研究を積み重ねてきた。結果、処分場を当初想定していた結晶質岩から、水を通しにくい固い岩盤「オパリンヌ粘土層」に変更するなど安全性を最優先にしてきた。

スイスの選定の特色は、日本のような公募方式を採っていない点と、早期からの「市民の参加」を組み込んで、政府承認を得ながら絞り込むプロセスを進めてきたことにある。

高レベル放射性廃棄物(核のごみ)の最終処分は  
原発立地国にとって決して避けられない課題である



# 最前線

## この目で確かめる

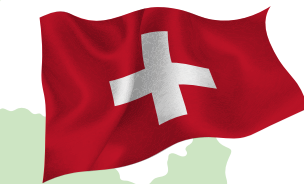
### 『先進地スイスに学ぶ』、『青森・福島の現状把握』

福島、北海道、東京、茨城、佐賀の高校 1、2 年生 15 人が 2025 年夏、スイスと青森県六ヶ所村で高レベル放射性廃棄物(核のごみ)の関連施設を巡った。高校生は国内外の取り組みを学び、核のごみの最終処分を「自分ごと」として捉えた。

### 『先進地スイスに学ぶ』

#### ① スイスの最終処分候補地

NARGAが2022年にスイス北部のチューリッヒ州の北部で、ドイツ国境に近い「北部レグレン」に選定した。地層処分施設は地下800メートルの遮水性に優れた「オパリナス粘土層」の岩盤に設置する。地下への入り口などの「地上施設」はチューリッヒ州シュターデルの農村地帯に建設される。



#### ② グリムゼル試験場

NARGAが1984年に設置した地下研究施設。スイス南部のグリムゼル峠にある揚水式水力発電所のアクセストンネルに隣接して造られた。地表からの深度は450メートル。地層処分や放射性廃棄物に関する研究・実証を行い、日本を含む国際的な研究プロジェクトにも利用されている。



#### ③ 集中中間貯蔵施設 ZWILAG (ツヴィラグ)

スイス北部のアールガウ州ヴェレンリンゲンにあり、原発を保有する電力会社が出資する会社が操業する。国内の全ての放射性廃棄物が集められている。使用済核燃料や国外に委託し返還された「ガラス固化体」が乾式で中間貯蔵されている。



#### ④ NARGA (放射性廃棄物管理共同組合)

スイスの放射性廃棄物処分の実施主体。連邦政府と原子力発電事業者5社の計6者で1972年に設立。本社所在地はスイス東部のアールガウ州ウェッティンゲンにある。



#### ⑤ ミューレベルグ原発

首都ベルンの西に位置し、1972年に沸騰水型原子炉1基が運転を開始した。福島第1原発の事故を受けて廃止され、2019年からスイス初の廃炉が始まった。使用済燃料は2023年に取り出しが終了し、2034年に解体が完了する予定。



#### 【首都ベルン】

スイスの人口は約900万人、面積は九州より小さい約4万平方キロ。連邦共和制で26州で構成する。永世中立国で公用語は独、仏、伊、ロマンシュの4つ。日本からの飛行時間は約14時間かかる。

首都ベルンは連邦議事堂のある政治の街だ。人口約14万人と少ないが、経済・文化都市チューリッヒでも約40万人、国連の欧州本部があるジュネーブは約20万人とどの街も人口が少ない。

ベルンは15世紀の石造りの街並みが見られ、旧市街全体が世界遺産だ。仕掛け時計の時計塔、点在する噴水、尖塔がそびえる大聖堂など見どころも多く、見ていて飽きがない。



#### 【アインシュタイン】



首都ベルンは物理学者のアルベルト・アインシュタインが1903〜05年、家族と暮らした街だ。そして「特殊相対性理論」など革命的な論文を発表している。

アインシュタインはチューリッヒの大学を卒業後、ベルン旧市街のクラム通りに居を構えた。特許局で働きながら自らの研究を進めていた。

当時の住居は現在、記念館「アインシュタイン・ハウス」となっている。使っていた家具が再現され、研究資料や手記が展示されている。見学科は千円ちょっと。近くにはアインシュタイングッズの販売店もある。偉人の足跡を感じることができる空間だ。

#### 【スイスフラン】

スイスの通貨単位は「スイスフラン」(CHF / S F r)。2016年から紙幣は新デザインとなった。硬貨にはラッペンなどもある(1スイスフラン=100ラッペン)。

スイスはEU非加盟国だが、スイス国鉄やデパート、高級ホテル、観光地などではユーロでの支払いが可能だ。ただ、おつりはスイスフランになることがほとんどという。

日本人にとって円安がもたらす物価高はネックだ。スイスは物価が高く日本の2〜3倍以上。外食はかなりの出費だ。訪問した8月中旬は1スイスフラン=約182円で推移していた。



#### 【スイスの食】

豊かな自然に恵まれた酪農王国で、新鮮な牛乳を使ったチーズ料理が知られる。また、チョコレート大国で有名チョコブランドが多くある。牛乳を使うミルクチョコレートが誕生したのもスイスだ。スーパーやお土産店にはチョコがずらりと並んでいた。乳清(ホエイ)を使ったソフトドリンク「Rivella(リヴェラ)」は大人気で、不思議な風味は一度飲むとクセになる。





## 講 評



## ● 藤本 武士様

経済産業省  
福島原子力事故処理調整総括官

高校生の皆さん、本当にお疲れさまでした。初めて参加しましたが、期待と予想をはるかに超えるレベルの高さで、刺激をもらい勉強させてもらいました。提案の中身がしっかりしており、プロセスの迅速化のための改善、話題となった「ゲーモチャット」での情報発信が良かったです。我々も対話と情報発信を常に大事にしていますが、必ずしも得意とは言えない分野だと思います。提案を参考に

させてもらいます。

3つお伝えします。1つ目は現場の強さです。発表内容がしっかりしていたのは皆さんの成長もありますが、現場を訪問したのが大きいのではないのでしょうか。福島第1原発や六ヶ所村、スイスに足を運んで、現地の方々と直接やりとりをしたのでしょうか。

経済産業省ではよく「現場主義」という言葉を使います。私は福島担当なので何度もお邪魔していますが、今後も福島の皆さんと話し、現場を見て、政策を進めてきます。どんな仕事に就いても現場に足を運ぶことを大事にしてください。

2つ目は議論・対話の大事さです。夜中まで仲間と議論したことがしっかりした提案につながっているのだと思います。また、会場との対話を通して、すごく理解が深まりました。ここが報告会の特徴であり、良い所だと思います。

3つ目がプレゼンテーションの素晴らしさです。役所がプレゼンをする、一つのスライドに情報を詰め込みすぎたり、正しいことを伝えなければと思うがゆえに細くなりすぎ、ポイントが伝わらないということがあります。今日の発表は簡潔にスライドが構成され、相当な準備をしたことが分かりました。

番外編ですが、OB・OGの方が研修を支えている点も素晴らしいと感じました。来年以降は今日発表した高校生が先輩たちを支えてくれるとうれしいです。

最後にアドバイスをさせていただきます。自分で考え、常識を疑うことが大事です。高校生の発表を聞くと、むしろ自分の方が心配に

## 挨 拶



## ● 横手 広樹様

経済産業省 資源エネルギー庁  
放射性廃棄物対策課長・廃炉産業室長

なりましたが、世の中で言われていることが本当にそうなのかと常に考えてほしいです。  
今日は身の引き締まる思いをしました。改めて我々世代の責任としてやることはしっかりと進めていきたいと思っています。廃炉や最終処分は決して簡単な課題ではないですが、前に進めないといけませんので、皆様と一緒に歩みを進めていきたいと思っています。

私は昨年のスウェーデンでの研修に参加し、高校生たちが夜遅くまで仲間と議論し、慣れない英語で発表する姿を見て、大いに勇気ももらいました。今年もぜひ参加したかったです。留守番役となつてしまい、参加できず残念です。

高レベル放射性廃棄物の最終処分ですが、原発を利用してきた現世代が必ず解決しなければならぬ課題であると思っています。放射性廃棄物はすでに存在しています。放射性廃棄物はすでに存在しています。放射性廃棄物はすでに存在しています。

現時点で唯一の解決策である地層処分の取り組みを進めていくことが現世代の責任と考えております。こうした思いで国やNUMO、電力会社を取り組んできました。必ずしも順調に進んできたわけではなくありません。ですが、最終処分の必要性については理解が深まっていると感じております。

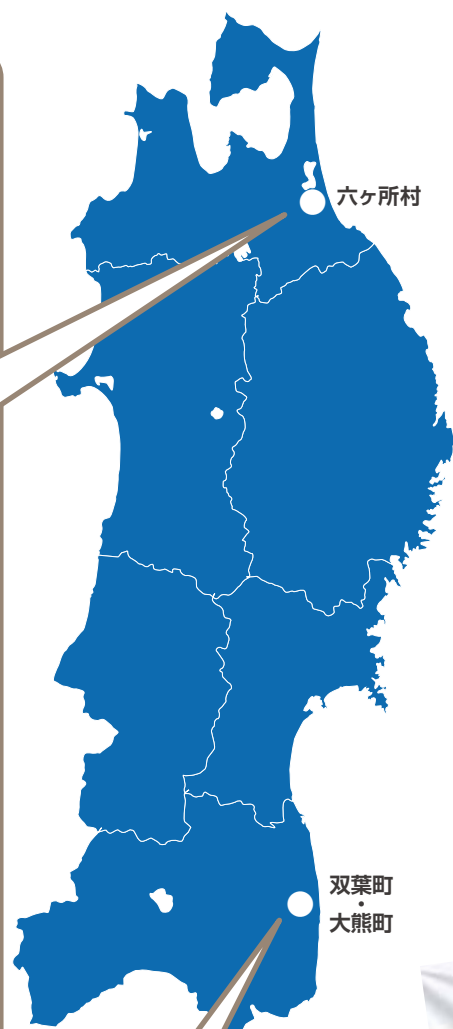
実際に北海道寿都町と神恵内村、佐賀県玄海町で文献調査が行われているところを見ても、前に進んでいると思っています。理解の輪をさらに広げていく必要があると思っています。

最終処分を進めていく上では、電気を利用している一人一人が原発や最終処分、福島復興などの課題を認識し、それぞれの立場で考えてほしいと思っています。高校生の皆さんにとっては、今回の研修がその機会になったのではないのでしょうか。ぜひ皆さんの考えを聞かせてください。

## 最前線

## この目で確かめる

## 『青森・福島の現状把握』



## 日本原燃

核燃料サイクルの商業利用を目的に設立された企業。「低レベル放射性廃棄物埋設センター」「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」「ウラン濃縮工場」を操業。使用済燃料をリサイクルする「再処理工場」「MOX燃料工場」の操業に向けて取り組む。

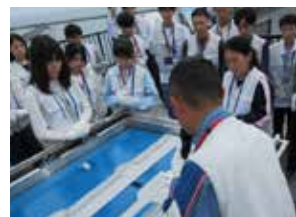
高レベル放射性廃棄物を再処理したガラス固化体を貯蔵する管理センターでは、ガラス固化体の上に立つことができる。PRセンターは再処理工程を紹介している。



## 東京電力福島第1原発

東日本大震災に伴って運転中だった1号機～3号機が停止後の冷却に失敗し、炉心を損傷する過酷な事故に至った。廃炉作業は今後、30～40年続くとされる。溶け落ちた燃料デブリへの注水などで発生する汚染水を多核種除去設備(ALPS)で浄化した処理水を2023年8月から継続して海洋へ放出しており、併せて環境への影響がないかモニタリングを行っている。

2024年から廃炉作業の課題の中核となる「燃料デブリの取り出し」に着手。2度の試験的取り出しに成功した。取り出したデブリの分析を実施し、今後の本格的燃料デブリ取り出しに向けた検討を進めている。









## 2026年夏、高校生対象のフィンランド「核のごみ処分の行方」研修



# ふくしま HIGH SCHOOL ACADEMY 2026 開催

特定非営利活動法人ハッピーロードネットは、高校生が海外研修を通して原子力発電所から出る高レベル放射性廃棄物（核のごみ）の処分について学ぶ事業を進めています。

2026 年は最終処分手業の先進地であるフィンランドを訪問する予定です。現地で関係者や住民から、最終処分手業の選定過程や住民理解の醸成などについて話を聞きます。

社会問題への理解を深めることは、自らの見識を広げることにつながります。

2026 年夏、一緒にこの問題について考えましょう！



▲ 2025年スイス・グリムゼル試験場近郊にて

主催・事務局 特定非営利活動法人ハッピーロードネット

〒979-0403 福島県双葉郡広野町大字下浅見川字築地25-1

TEL : 0240-23-6172 E-mail : office@happyroad.net